琉游舎

アトリエ琉游舎だより 152号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2023年5月10日発行

並足 速歩 駆歩 襲歩

（なみあし）　（はやあし）　（かけあし）　（しゅうほ）

○馬の歩き方は４つに分類できるようです。「並足」は馬の歩き、人間に見立てればウォーキングです。「速歩」は馬の小走り、ジョギングです。「駆歩」は馬の走っている状態です。「襲歩」は全速力で走った状態、競馬に見られる走法です。時速６０キロほど出ます。

○私は馬術にも競馬にも詳しくないのですが、それぞれの馬の歩き方を人間が操って、馬と共に人は生活をしてきたのでしょう。私の子供の頃は、まだ農家では家の土間で馬を飼育している光景を見かけました。トラクターが出現するまで農耕馬は貴重な農家の労働力だったのです。農耕馬だけでなく、運送手段、軍馬など人は馬の歩みを操ることで貴重なパワー（動力）を得ていました。馬力は馬一頭分の動力にあたるものを１馬力として単位設定されたものです。

○ちなみに人間は大体0.25馬力くらいと言われています。つまり馬一頭は人間４人分の動力を肩代わりしてくれているのです。ただ馬の駆歩まではついていけそうでも４人束になっても襲歩だけにはついて行けません。それぞれの状況と役割に応じた「歩」が必要なようです。

○人の「歩」も並足　速歩　駆歩　襲歩を状況や立場、年齢によって使い分けながら歩を進めて来たのでしょう。馬の場合は「歩」を人間が制御することで馬を動力として活用することができましたが、人の場合はその「歩」を自分で制御して前に進まなければなりません。

○並足ばかりでは人に追い越されるばかり、駆足や襲歩は長続きしません。それぞれの「歩」をバランスよく使い分けながら、時には小休止や大休止をしながら前に進んで行くことが、長く歩み続けることのできる秘訣ではないでしょうか。琉游舎が歩を進め始めて６年が経ちます。これからも並足を基本にして、必要に応じて速歩、駆歩、襲歩を折り混ぜながら慌てず焦らずゆっくりと地道に「歩」を進めて行きます。琉游舎を今後も宜しくお願いいたします。

5・6月スケジュール

月	火	水				
			11 映画会 お休み	12	13	14
15	16	17	18 映画会 お休み	19	20	21
22	23	24	25 映画会 お休み	26	27	28
29	30	31	6月1日 映画会 お休み	2	3	4
5	6	7	8 映画会 お休み	9	10	11
12	13 読書会 13時半から	14	15 映画会 13時半から	16	17	18

琉游舎は活動を徐々に再開です

読書会
6月13日
（火）13時半

６月の写経会お休みします

映画会
６月に入って再開の予定です

狂言綺語…遊此娑婆世界

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

そろそろ遅霜の心配もなくなり、花粉の飛散も収まって、春から初夏へと季節は移ってきているようです。気がつくと木々も若葉に覆われ、花が至るところで咲き誇っています、梅雨前のさわやかな気候に心も体も外に向かって活発に動き始め、この期を逃さず始める夏野菜の準備や草取り、庭造りの心地よい汗が夜の快眠を誘います。暖房も冷房も殆ど必要としない５月は、自然との一体感を生き物たちが実感できる時です。

５月初旬の田園地帯は水に満たされます。用水路や田んぼは水が一面にはられ、田植えが始まり蛙の声があちこちで聞こえ始めます。水面に太陽の光が煌めいて田園は光輝きそして空には鯉のぼりが気持ちよさそうに泳いでいます。空高く泳ぐ鯉のぼりは夏の生育と秋の実りをもたらす生命力の象徴のようです。かつては成長や出世を願って男の子が生まれると競うように家々の甍と雲との間を気持ちよさそうに泳いでいたものですが、最近めっきりその風景を見かけなくなりました。子供の減少や鯉のぼりをあげる手間暇がないのか、それとも近所同士で泳ぐ鯉の数や大きさを競ったりすることに倦んだか、子供の成長を願うことで家や集落が末永く続くことを願う気持ちが希薄になったせいなのかもしれません。田園風景に鯉の泳ぐ姿を見かけなくなったのに反して最近観光目的で川や渓谷の両岸を渡って無数の鯉をぶら下げる光景をテレビなどでよく目にします。私にはそのぶら下げられた鯉に自由に大空を泳ぐ姿を重ね合わせることは難しく思えます。

法華経観世音菩薩普門品第25は観音さまについて書かれた、日本人に幅広く支持されている観音信仰の根拠となる経文です。次の一説は「世尊　観世音菩薩　云何遊此娑婆世界　云何而為衆生説法（世尊よ、観世音菩薩は、云何にしてこの娑婆世界に遊ぶや。云何にして衆生のために法を説くや）」と、無尽意菩薩が世尊（お釈迦様）に質問している言葉です。娑婆世界に遊ぶという観音さまの行為は衆生のために法を説くという行為です。どのように説くかと問われると、観音さまは世を救済するために、衆生の機根（性格や仏の教えを聞ける器）に応じて、種々の形体（33の姿）で現れると答えます。観世音菩薩はあまねく衆生を救うために相手に応じて「仏身」「声聞身」「梵王身」など、33の姿に変身すると説かれているのです。観音さまが33ものあらゆる姿に変えて、衆生の状況に応じて済度することができるのは観音さまが「遊此娑婆世界」をしているからなのです。「遊」は何物にも囚われないありのままの世界を生きることです。執着やはからいを脱ぎ捨てて自由自在、縦横無尽に世界とコンタクトし他者と共棲することです。「遊」は趣味でも娯楽でもありません。ましてや仕事でもボランティアでもありません。義務や善意などのはからいや価値の判断から完全に自由になることです。「こだわり」の意識がある限り私たちは他者と共棲することができません。こだわりは受容と拒絶の判断基準となるものです。仏教の行いの根本は「遊」にあります。仕事やボランティアとは極北にあるものです。他者をありのままに観てありのままに共に歩もうとする行いが「遊此娑婆世界」なのです。観音さまは常にそれを望む他者（私たち）と共に一緒に歩み続けてくれるのです。

法華経観世音菩薩普門品ほどお釈迦様の教えとかけ離れて信仰されている経はないのではないかと思われます。確かに経文の字面を辿れば観音さまを信仰すればあらゆる災難から逃れることができ、願いが叶うという現世利益を約束したような言葉が連なっています。しかし仏教の教えの基本は出世間です。つまり世間を出て精神と行動の自由を獲得し執着、つまり苦の世界から自らを解き放つことにあります。法華経の教えは現世を生きながらもそこに安らぎの世界（娑婆即寂光土）を望みその実現のために現世を生きることにあります。ですから現世の利益を得るための観音さま信仰は法華経の教えから正反対のものになります。観音さまを信仰することは観音さまと共に現世の執着（現世利益）から解放されて「遊此娑婆世界」つまり安らぎの処に向かって進もうと願い誓い行うことです。それは信仰者自身が観音さまと一体となることなのです。

仏教用語に十界互具があります。十界は生類の迷いと悟りの生存や境地を十分類したものです。迷いの生存は地獄界、餓鬼界、畜生界、阿修羅界、人間界、天上界の６種。ここの生存はその行為（業）によってそれぞれの界に転生するので六道輪廻といわれています。悟りの世界は声聞界、縁覚界、菩薩界、仏界です。天台宗の祖智顗は十界の一つ一つが、互いに他の九界を備えているということ（十界互具）、地獄の衆生も仏となりうるし、仏も迷界の衆生となりうるという教えを法華経から導き出しています。つまり私自身の中に地獄の性も仏の性も兼ね備えているということです。私たちは仏にもなり得るし閻魔大王にもなり得るのです。もちろん観音さまにもなり得るのです。法華経の教えの柱である「私たちは全て仏になることができる」という教えはこの十界互具の教えが根底にあります。私たちの外側に観音さまがいて私たちの現世の願いを叶えてくれるという教えは法華経からは語られようがないのです。観音さまは私たち自身なのです。

経文を一部だけ抜き出して都合よく解釈され利用されてきたものの一つが法華経観世音菩薩普門品第25です。観音さまに現世の自分の願いを全て丸投げすればそれを叶えてくれるなどという、ばかげた教えはそもそも仏教にはあり得ないのです。法華経の根本の教えを踏まえた上で観音さまを信仰すれば、その願いが私たちを動かす原動力となりその実現に向けて自らの足が歩み始めるのです。観音さまは私たちの行いを共に歩み、励まし道を指し示してくれる相談相手、同行者です。観音さまは外部ではなく、私たちの中にいて私たちを内面から突き動かす意思となるのです。その時私たちは観音さまと共に「遊此娑婆世界」にあることを認識できるはずです。琉游舎は観音経の教えに忠実に大空を自由に泳ぐ（游）鯉のぼりのように、「遊此娑婆世界」にあり続けたいと「願い誓い行う」日々を歩み続けていきます。

琉游舎：戸井　出琉・恭子
問い合わせ：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319－17コリーナ矢板Ｃ－８５０
メール：toi101izuru@outlook.jp